

雪

芥川龍之介

青空文庫

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に、ちうあうせん 一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論もちろんまつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも山脈の皮膚に近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふと或小事件を思ひ出した。――

もう四五年以前になつた、やはり或冬曇りの午後、わたしは或友だちのアトリエに、――見すばらしい鑄いものあぶらゑのストオヴの前に彼やそのモデルと話してゐた。アトリエには彼自身の油あぶらゑ画ほかの外ほかに何も裝飾になるものはなかつた。巻煙草まきたばこを啣くはへた断髪だんぱつのモデルも、――彼女は成程なるほど混血児あひのこじみた一種の美しさを具へてゐた。しかしどう言ふ量見か、天然自然まっげに生えた睫毛まつげを一本残らず抜きとつてゐた。……

話はいつかその頃の寒氣かんきの厳しさに移つてゐた。彼は如何いかに庭の土の季節を感じるかと言ふことを話した。就中なかんづく如何に庭の土の冬を感じるかと言ふことを話した。

「つまり土も生きてゐると言ふ感じだね。」

彼はパイプに煙草をつめつめ、我々の顔を眺めまはした。わたしは何とも返事をしなんずに勻にほひのない珈琲コオヒーを啜すすつてゐた。けれどもそれは断髪だんぱつのモデルに何か感銘かんとくを与へたらしかつ

た。彼女は赤いまぶた瞼もたを擡もたげ、彼女の吐いた煙の輪にちつと目を注いでゐた。それからやはり空中を見たまま、誰にともしなしにこんなことを言った。――
「それは肌も同じだわね。あたしもこの商売を始めてから、すっかり肌を荒してしまつたもの。……」

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論まつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも人間のさめはだ鮫肌さめはだに近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふとあのモデルを思ひ出した、あの一本も睫毛まつげのない、混血児あひのこじみた日本の娘さんを。

(大正十四年四月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>